

---

# 少女の憧れた世界、

森山時人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

少女の憧れた世界、

### 【Nコード】

N6312Y

### 【作者名】

森山時人

### 【あらすじ】

憧れている、世界があつた

### 少女の、話

少女の憧れているもの、世界、グループ、クラス。  
そんなたくさんの話を  
短編形式でつづつていけたらなあと思ってます。

## 憧れている世界

憧れている、世界があった。

それは、世界という大げさなものではなくとも、輪であり、グループであり、集まりだった。

いつも、教室の片隅から 私はふ、と目をやる。

昼休み、5分休み、放課後に廊下で毎度繰り広げられる会話に。表情に。

彼らは、決してわーきゃー騒いだりだとか、ふざけて廊下を走ったりというようなグループではなくとも、自分達の趣味を語り合い、楽しむ そんな人達だ。

それは、必ずしもまわりにいい印象をもたれるわけではない。俗に「オタク」と呼ばれる種族ではあっても、それを主張せず、否定しようともせず、けれども世間体のために問われれば曖昧な態度で誤魔化す：そんな彼らに、私は憧れた。

「…いいなあ」

と、口をついて出る。しかし、私の周りに誰がいるというわけでもなく、その言葉は風に溶けた。

私も、おとなしい性格柄、あまり積極的に話すこともできなければ積極的に行動できるわけでもないの、友達も数えるほどしかおらず、男子の友達などもつてのほか：そんな私が、「仲良くなりた」という意思を持つほどに、憧れている存在なのだ。もちろん、こんな感情を他のクラスメイトや生徒が持つとも思えないが。

そんな憧れを抱いていたからこそ、行動に少しでも移そうと同じ班になったその彼らの一部に話しかけ、多少の絆を作れないか試みてはいるものの、浅入りはできてもどうも深入りはできないらしい。これが「男子と女子の境界線」というやつだろうか。それとも「男子の聖域」というものなのだろうか。

どうももどかしい思いを引きずるので、彼らの一部にある時間にかけてみる。

「ねえ、やっぱりさあ、『男子だけの世界』みたいなものが、ありのかな？」

彼らの一部である彼は、少し戸惑ったような表情を見せ、そして私の言葉はまたも風に溶けるのかと思ったそのとき、彼はおもむろに口を開いた。

「僕はそういうのわかんないですけど…あるんじゃないんですか？どこまでも女子が仲良くできたとしても、『そこ』に元々あるグループには入れない。四月でもない微妙な時期に来た転入生が、輪に入りづらいのと同じですよ。」

彼はそう言って、その例えに出した『四月でもない微妙な時期に来た転入生』に視線をずらしながら答えた。

私は、入りづらくなんかない、入りたいんだ そう言おうとした矢先、彼のその微妙な表情に、言葉を飲み込んでしまった。

「そうだよね…まあ、私は私なりに、仲良くしようかな…駄目かな？」

「それなら、いいんじゃないんですか」  
わかってくれたなら幸いです、という風に、彼は私の肩をトンと叩く。

深入りできない、もうひとつの理由が、あるかもしれない。勘違いかもしれないが、男女間のグループになると、「恋愛」が生じるから そんな理由もあるのではなからうか。

現に私が、そう想ってしまったのだから。  
「恋人」としてなら、グループには入れるものだろうか？そんなことを考えてしまう。これも、勘違いだろう。

よく、こんな問いかけがある。「男女間の友情って、信じるか？」それをNOと答えるのだろう、彼は。私だってNOと答えるだろうから。

男子と、女子。 この関係は、どうも曖昧で、グダグダしていて、

微妙な そんな部分がある。

今の私には 頑張っても、彼らに深入りできそうにない。

## 憶れている世界（後書き）

初めてまともに書いたものです。

あまりいい出来とは言いがたいですけど…

結構前に書いたやつですので。

まあこんなのも見てくれる方がいらっしやったら何よりです^^

ちなみに、これに出てくる「少女」「私」は、

毎回別物と思ってくださって結構ですw

## 憧れている人

憧れている、人がいた。

それは、中学生のピアニストだった。別にデビューしているわけでもないからピアニスト、というわけでもない気がするが。その人に憧れを持ったのは、中学3年生。中学最後の合唱コンクールの伴奏者を決める時だった。

私の学校では、クラスで伴奏をやりたい、という人が被った場合、先生の監督の下オーディションを行う。オーディションといっても簡単なもので、先生が見ている前で数十秒今習っていたりする曲を弾いて、その中から伴奏をする人を選ぶ、というものだ。

私のクラスでは、私、バレー部の井上さん、そして帰宅部の時田の合計3人が立候補して、オーディションになった。じゃんけんで勝った私は、2番目を迷わず選択した。1番が井上さんで、3番が時田だった。井上さんは、まだ暗譜していない曲だったらしく、右手しか弾けずに終わる。次は私の番だ。緊張しつつイスの高さを調節して、イスに座る。まだ途中までしか覚えていない曲だったが、それなりに弾けたんじゃないかと思う。有名なアーティストの曲のピアノアレンジだった。

そして、時田。クラスではあまり目立っていない男子だ。どんな曲を弾くのだろうと、多少わくわくした気持ちで時田に視線をやった。音、旋律を聴いた瞬間、全身に鳥肌がたったようだった。1番目、2番目の井上さんや私と比べ物にならないくらいのレベルで、とてもじゃないけど今の私じゃ叶わないな、と自分でも感じた。彼女もそう感じたようだった。私が目をやると、諦めたように肩をすくめてみせる。

初めてだったかもしれない。ピアノの演奏を聴いて鳥肌が立ったり、こんなにも聞き入ってしまうのは。

それ位、格好よくて、きれいで、…気がつけば演奏は既に終わっていて、伴奏者が彼に決まったところだった。

その日から私は、彼に憧れて、一目ぼれして 彼に負けるものかという気持ちで、毎日毎日練習をし始めた。彼に話を聞くと、彼は一日2時間位は練習しているらしい。私は部活に入っているのだからなかなかそのようにいかず、アップライトピアノであるためヘッドホンをつけて夜やるわけにもいかない。どうにか時間を見つけて、足りない分は土日に倍やった。彼に追いつくように。

いつか追い越せるように。

彼の倍やろうやろうと思う程、かなり疲れがたまっているらしく、給食準備中の待ち時間、気がつけば私は机に突っ伏して眠ってしまった。5分ほど経っただろうか。肩を誰かにたたかれて私は起こされる。時田だった。時田と私は同じ班だ。見ると周りはおもう給食を食べ始めている。私の机に置くことができなかつた給食が、時田の机に寄せるように置かれていた。申し訳ない、と思いつながらお礼を言つて給食を受け取り、牛乳にストローをさす。冷たい牛乳で目を覚ました。少し食べ進めて、周りが騒がしくなってきたときに、時田のほうから口を開いてきた。

「…最近昼休みとか朝休みも、音楽室借りて練習してるよね」

そう。私は休み時間も割いて練習しているのだった。伴奏者になつていないからまあいいだろう、という先生の計らいのおかげだった。

「うん、そうだよ？」

それが何か、というように私は返す。ちょっとそつけないような返し方になってしまった。

「この間の伴奏者決めがあつたから？」

核心をついてくるなあ、と思つた。でもそんな事表情に出さず、

「うん、まあ、ね。今更練習したって何かなるわけでもないけど。

これは勝手なライバル意識なんだけど、負けたくないから。追いつきたいから。今の私には、それが無理ってわかつてるから。だから、



なるべく時間割いて練習。」

話さなかったほうがよかったかもしれない。これは、私にとってもあまり話したくない話でもあったから。彼に憧れているんだ、なんて言えるはずもない。でも、

「初めて時田の演奏聞いたときさ、憧れた。尊敬した。格好いいなあって思っで、きれいだなあ、って思っただから。」

時田は、それを聞いて驚いたような顔をして、やっぱり言わないほうがよかったなあ、とまた後悔する。少しして彼は平静な表情に戻って、

「…いや、驚いた。俺なんかに憧れる奴がいるとは思ひもしなかったから。じゃあさあ、俺からの提案なんだけど」

そんなことを言ってきた。提案？と私が首をかしげると、時田は説明を始める。

「追いつく、追い越すの基準はともかく、俺に追いついたらその時、連弾しようぜ。その時は高校生になってるかも、だけどな。中学卒業までにできるか？」

なんて、挑戦的な笑顔で私を見据える。挑発にのってやって、こう返してやった。

「Sure. もちろんできるにきまつてんでしょ」  
受験勉強もあるのにな、とまたまた言った後多少の後悔があるのだが、担任の先生がこういつていた。

『何かをした後悔より、何かをしなかった後悔の方が記憶に強く残る』と。

なら。言ってしまったって、それが実現できなかったほうがマシじゃないか。もちろん、そんなことはなくかならず両立させて実現してみせるけど。

「そっか、じゃあ追いついたら言えよな」

ちょうどタイミングよく給食を食べ終えた彼は、その言葉とともに席を立て片付けに行った。

卒業まで、あと半年ほど。

## 憶れている人（後書き）

作者の名前と帰宅部男子君の名前が微妙に被ってたりするのは気のせいです。私女子だし。

そんなこんなで2作目。かなり長くかけたんじゃないかね、と思います。私頑張れです

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6312y/>

---

少女の憧れた世界、

2011年11月20日19時34分発行